県立正傳高校

白苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
県立正傳高校

【Ｎコード】
Ｎ６４７５Ａ

【作者名】
白苑

【あらすじ】
もしもだ、自分達の今住んでいる世界以外の世界があったらどう思う？行ってみたいと思わないか？俺は思う。ある事件をきっかけに、それまで普通の高校生だった俺はどんどん深く、異世界へと落ちていく事になる。

1話：それは偶然にも・・・

今日から高校生である。俗に言う青春と呼ばれる時期であろう。

俺は、自転車で１０分という中々の近場である県立正傳高校という所に進学した。ちなみに俺は正傳という言葉にどういう意味があるのかなんて知らんし興味も無い。

ちなみに選んだ理由は近いのと、学力的にたいして高くなく、とりたて低いわけでもない。まさに俺にぴったりのレベルの高校。という二つの理由から選んだのである。

別に、俺がこの高校を選んだ理由など、全国的に有名なお昼の番組司会をやっているタモさんの髪が地毛かカツラかぐらいどうでもいいことであるが、記憶の片隅にでも保存しておくといい事があるかもしれない。

その県立正傳高校に進学した俺は今まさに入学式を行っている最中である。

・・・まったくもってだるい。別にこの高校の歴史なんて入学式で話す事でもないだろうに。俺はニコニコしながら半永久的に誰かが止めなければ喋っていそうな校長を黙って見ているのも飽きたので、周りを見渡してみた。

俺と同じで飽きたのであろう生徒は明らかに校長の話を聞いてないような感じに上の空な奴らもいるが、大半は期待と不安で入学生特有の顔をしていた。

クラスは１－Ｂというクラスになった。別に学校名の割りに普通のクラス名でほっとしていた。クラス名を変な名前にする理由などないと思うが。

俺は一年間同じクラスの中で空気を奪い合う仲になるクラスメイト

達と一緒に教室の中に入っていった。
担任は神成（かんなり）　巳幸（みゆき）女教師であった。言葉だけ見れば羨ましがるやつもいるだろうが。もう３０代後半と思われる雰囲気をだしている。・・・ありゃあ結婚してないな。
担任に対する勝手な評価を下してから周りの席の奴らを観察する。前にいるのは短髪の男。後は特徴がこれといってない感じの女の子。そして左が・・・
「ありゃあ結婚してないね」
俺と同じ分析をして、尚且つそれを口に出して言ってしまうような女である。

担任の女教師が自分が神成　巳幸であること趣味や歳（３６歳）であることなど、特に脳にインプットすべき事ではないこともあるが、いちお記憶しておく事にする。ちなみに趣味は裁縫らしい。
担任の神成　巳幸は自分の紹介などを話すのにも限界があったのだろう。少しの沈黙の後に俺たちの自己紹介を要求してきやがった。なんて余計な事をいいやがる。
あまり目立ちたがりの奴以外は自分の自己紹介などめんどうで恥ずかしいだけの行為だろう。だが、担任が言い始めて更に一番の安東とかいう男から始まってるのであれば、俺がここでとやかく言うわけにもいかないので、俺も無事に自己紹介を終えるためになんと言えばいいのか考え始めていた。俺は五十嵐（いがらし）　純也（じゅんや）。なんとア行である。こういう時は父親の苗字を恨むのだがそんな余裕も時間もない。
「五十嵐　純也です。一年間という短い期間でありますが、よろしくお願いします」
よし、短時間で考えたには中々の短い文章で無難な文章だ。担任ともう既に自分の番が終った奴以外はおそらく聞いていないであろうが。

４０名のクラスメイトの名前を全部覚えられるわような便利な脳みそを持って生まれてきたわけではないので、俺は適当に聞き流していた。
が、俺のとなりの女の自己紹介は嫌でも耳に入るような大声で周りの空気を大きく振動させていた。
「小戸神　朋恵」
だけか？それ以降は口をチャックで締めたかのように口を開かないうえに速攻で席に座ってしまった。

ふぅ、面倒な奴のとなりになっちまった・・・。

第二話：罰ゲーム

何かの小説でよんだ気がする。学校初日に自己紹介で周りの空気を一瞬で0℃以下まで下げた自己紹介。確かハ○ヒだったか？いや、それは今はどうでもいいことだ。問題は、この女がそいつみたいに宇宙人～みたいな事をいいださないかだ。

が、俺の不安は当たらなかった。その「小戸神　朋恵」（おとかみ　ともえ）はそんなことをいいだす奴ではなかったのは幸いだ。ま、小説を読んだ限りでは不幸を体験するのは前の席の奴だしな。

一言でいうなればその考えは甘かったということか。

小戸神　朋恵は別に女子と話すし、変なことを言い出す女ではなかった。普通にみれば「美少女」に分類されるであろう顔に、髪は長くて腰まで届きそうである。が、一つあれなのは・・・

「話し掛けてくんな、ボケ」

と男子が話し掛けるとこう切り返されるのである。だれが話し掛けてもだ。もちろん教師が男ならものすごい勢いで罵声を浴びせる女だ。それを正常といえようか？いやそうな顔をするのは分るがここまで露骨に男を邪魔者扱いせんでもいいと思うのだが。

「おい、このゲーム負けた奴は小戸神に話し掛けるってのはどうだ？」

今、俺はクラスメイトの渡辺と武藤の二人とトランプをやっているところだ。ババ抜きだが。そこ、幼稚と言ってもかまわないぞ。俺も丁度思ってたところだ。だが、まだ始まったばかりの高校生活で誘ってもらったのに断るなんてことは俺には出来ない。今だけだろうな。

ババ抜きをしてるところまではいいだろうが、武藤の罰ゲームの提案は勘弁してもらいたいところだ。

「おいおい？あの小戸神に話し掛けろってか？ものすごく嫌そうな顔をされて罵声を俺たちが逃げた後も言ってそうだぞ？」
俺は武藤のトランプを一枚引き自分の手持ちに加える。よし、９はある。
二枚カードを捨てながら俺はなんて話掛けるのかを聞いた。
「そりゃあお前自分で考えろ。人に頼ってばかりの人間だと大きくはなれねぇぞ？」
つまりは全く考えていないらしい。渡辺は自分にその罰ゲームという名の矢が当たりたくないのだろう。ものすごい勢いの集中力を見せている。いや、ババ抜きって基本運じゃないのか？
「いいか？人はいろいろんな事に挑戦して成長してきたんだ。そして、このババ抜きは挑戦者を選ぶためのものだ！！」
なにやら熱弁しながらくだらない事をいってやがる。そんな挑戦、１人で勝手にやってやがれ。俺たちを巻き込むな。
もう途中なにがあったかなんて面倒なので描写を省くことにしよう。結論から言えば負けたのは俺だ。最後の二択を武藤に当てられてしまって見事罰ゲームが確定してしまった。
「はっはっはっ！正義は必ず勝つのだよ五十嵐君っ！」
お前が正義ってことは俺は悪か？いったい何をもって自分を正義で俺を悪と言っているのかは分らないが、とりあえず調子に乗ってることだけは誰の目からでも明らかであろう。
「じゃあ約束の罰ゲームを今っ！果たしてもらおうか」
「おい、大体俺は了承してねぇぞ？」
別にやってもいいが、無残な結果に終ることを自分からやりたくないと思うのは人として仕方が無いだろう？
「なにチキンな事を言ってるんだよ。やらないなら今日からお前をキング・オブ・チキンと呼ぶぞ！」
そんなあだ名で呼ばれて周りに定着しても困るので、俺は小戸神に話掛けることを決意した。

「・・・よお」
「・・・・・・・」
い、いきなりのシカトである。
俺は渡辺の席から小戸神の席に移動して話掛けたが、現在このような反応をされた。いや、この場合反応がないと言うのが正しいのか？とりあえず、政治家が記者の質問をシカトする時並のシカトで俺の声は小戸神の耳にはどうやら入らない。もしくは入れようとしてないらしい。
「あのさ・・・」
「・・・何よ？」
OKとりあえず耳には入ってるらしい。さて、反応をしてくれたのでここからどうやって話題を広げよう。
「用が無いなら話掛けないで？ウザイから」
と俺が数秒間考えてる時間すら惜しいらしく、速攻で会話は終了した。会話と呼べるものかどうかは、気にしない方針で行こうと思う。
俺は武藤と渡辺に無理と手をひらひらさせて合図すると、二人とも笑いを堪えてやがった。あいつら、いつかぶっ飛ばす。

その後は普通にクラスメイトの女子とは普通に話してる雰囲気なのだが、なぜ俺たち男とは話したがらないのだろう？ま、人それぞれか。
「ん～顔はいいんだがな。どうもだめだ。きついな」
まったくもって同感だが、お前にそんなこと言える権利はないと思うぞ。
「いいんだよ、聞こえないなら別にいいんだよ」
まったくもって弱い奴である。弱者という言葉はこいつのためにあるものではないのか？俺は俺でくだらない思考をしていると1人の女が歩み寄ってきた。
「ねねっ！小戸神に話し掛けた？すごいね？勇気あるね？」

第一印象はものすごく明るい人ということだ。

第三話：会話？

この明るく美人な女は誰だ？と思ってしまった。あの小戸神の自己紹介で他の人の自己紹介など覚えていない。

「あ、自己紹介聞いてなかったでしょ？私は久須見（くすみ）　春海（はるみ）。おし、脳内に入ったかな？」

俺が頷くと久須見は満足そうに頷いた。結構愉快な奴だ。小戸神とは大違いだな。

「いやぁ～私ね？今まで最初は興味本位で小戸神に話し掛けてた奴らを見てきた隣の貴方が話しかけたのが面白くてね」

つまり、無残な結果に終る事を自分からやっている姿が面白かったらしい。俺は好きでやったわけじゃない。

「あ、そうなんだ。でも、まだ貴方はましなほうよ？もっとぼろくそ言われた奴はイッパイいるんだから」

ケラケラ笑いながらずいぶん1人でツボにはまっているようだ。そんな事知っているさ。

俺だって最初は、小戸神の顔と女子と話してる雰囲気を見れば普通にいいなぁ～って思っていた。そりゃあ俺だって健全な男子高校生だ。女子とはお近づきになっておきたいものだ。が、相手は俺の望みを核爆発を起こした勢いでぶっ壊してくれた。

前にちょっと顔のいいギャル男が小戸神に話し掛けていた。

「ねね、この後暇？親睦も兼ねてさ、何人かで遊びいかない？」

「いかない」

即答である、まさに光の速さの如く断りを入れていた。

小戸神はそいつの顔もみないし、席に座って目線を前のほうに向けていてピクリとも動こうともしない。

「いいじゃん、ちょっとだけだからさ。ていうか、もう来るしか無

くね？俺が誘ってるんだからさ」
はぁ、うちの学校、いや、このクラスにこんなアホな奴が居たとはちょっとばかりショックだ。それに、小戸神は額に血管が浮き出るんじゃないかというくらいすごい顔をした。
「ふざけんな！なんで私があんたみたいな下等な奴と一緒に居なきゃいけないわけ？遊びに行くですって？はっ！！1人でカラオケ篭ってアニメソングを熱唱してろボケがっ！！」
いや、確かに男の言ってる事もあれだったが、こいつの言ってる事もすごい。ていうか、女がこんな言葉を発する所を始めてみた。いや、都会の中心部いけば居そうではあるが。
その名前も知らないギャル男くんは、小戸神の発言を聞いて自分をみてくる視線に耐えられずにどこかへ逃げていった。ご愁傷様である。

まぁこんな事が俺の隣の席で起こったのだ。しかもこれだけではない。男なら誰でもこんな感じで追っ払うのだ。できれば自分からは仕掛けたくないと思うのは当然だろう？
が、ゲームをし、その途中で武藤が提案した罰ゲームを実行した俺を誰が責められよう？俺はただ忠実に事を実行に移しただけだ。
「ま、でもさ。私も友達として男とも仲良くしてほしいわけよ？だからさ、隣なんだしちょっち粘ってくれない？」
また妙なお願いをされたものである。小戸神と仲良くだって？俺が望んでも小戸神が受け付けないだろう。あいつは男に対する赤外線とバリアを張ってあるのだ。男が近づくと赤外線が察知して、バリアを展開する。更に威圧感までだしやがるぞ。
「そこを頼んでるんじゃない。小戸神が男と話すようになればクラスの雰囲気もずいぶん良くなるしさ。それに行事とかあるときに困るっしょ？普通に話せないのって」
まぁ確かにその通りではある。男は小戸神を避けてるからなんとなくそこら辺の雰囲気は悪いものである。改善できるならしたほう

がいいに決まってるのだが、なぜその役目が俺に回ってくるのかが理解できないぞ。
「細かいことは気にしないのが、人生上手くやってくコツだよ？ま、とりあえずね。まかせたよっ！」
と、言い残し女子の輪の中に入っていった。あの中にはは入れないな。
「おいおい、どうするんだ？お前」
武藤は面白がっているだけのようだ。他人が犠牲になって面白いことをやるなら確かに面白がるだろうが、ものすごくむかつく。
「危ないんじゃない？あまりしつこくするとぶっ飛ばされるって聞いたよ？」
犠牲になる俺を心配してくれてるらしい渡辺をちょっと有力な情報をくれた。
どこからの情報だよそれは。
「え？秘密かな」
どうやら企業秘密らしい。将来の職業は新聞記者や情報屋にでもなるつもりか？
「そんなつもりはないけどね。で、どうするの？役目を引き受けるの？」
「さぁな？気が向いたらとだけ答えておこう」
俺はさもヤル気が無い口調で答えた。実際ヤル気など数値化したら、ナノな桁であろう。

小戸神は4月の中旬に入っても男とはまったく話をしなかった。いや、まったくではないな。罵声だけは浴びせてる。
対する俺はというと小戸神に話し掛けるのを戸惑っていた。自ら屍になるのを望むのは自殺志願者だけだろ？
だが、事態は動いたのだ。なんと小戸神から話し掛けてきたのだ。
「あんた、春海と仲いいの？」
と、小戸神からアプローチをかけてきたのだ。

俺は戸惑いながらしっかり対応をした。
「いや？別に適当に話す程度の仲だが？」
「ふぅん」
とまぁそれだけである。でも十分な収穫といえるのではないか？相手から話し掛けてもらえたのは大きい。おし、役目を果たすために少し話し掛けてみるか。
「久須見とは仲がいいのか？」
「別に？気になるの？」
お、俺から話し掛けて話が繋がったのは初めてじゃないか？ちょっとした感動を覚えるぞ。
「別に、ただ聞いてみただけだ」
「あそ・・・。あの子、普通の子と違う印象を受けたのよ。第一印象で」
俺はお前の第一印象がどの女子生徒よりも違う・・・いや、ずれてる印象を受けたぞ。
「そういうことじゃないわよ。それになに？私がずれてる？」
「あ、いや、今のは言葉のあやだ」
小戸神は機嫌を悪くしたらしく、「ふんっ」と鼻で軽くあしらいやがった。ま、でも会話になってたと思うぞ？

それから俺達は何度か会話もするようになっていた。相変わらず長くは続かないものの、人と人が会話していると周りからも認識できるくらいの言葉を交わす程度になっていた。
「なによあのドラマ。婚約者が現れたから身を引くですって？情けない女ね。本当に好きなら奪えばいいのよ。世の中奪ったもん勝ちよ」
こいつは将来強盗にでもなるつもりか？こいつなら人質を全部殺してから金などを盗み出しそうだが
「大体男も男よ。女1人守れないなんてダメな奴ね。私ならケツに蹴りを何発も入れて、東京湾に足枷つけて沈めるわ」

こいつならやりかねない・・・。俺は小戸神の威圧感と春なのに蒸し暑い感覚から逃れるためにネクタイを緩めた。

突然ここで県立正傳高校の制服などをご説明しよう。俺が説明するのは物凄くメンドイが、あまりにも描写が少ないため仕方がある まい。

県立正傳高校の制服はブレザーだ。夏はネクタイ付シャツブラウスがうちの高校の制服だ。ネクタイの色は一年が赤、二年が青、三年が緑といった感じだ。そこ、ありきたりとか言わないように。

つぎに上履きもネクタイの色のように、学年によって分けられている。

そして、学校の場所だが山が物凄く長い坂の後ろにあるような場所だ。ちかくにはコンビニなどがあり、駅から約１０分という中々便利な場所にある。近くには商店街などもあり、学校の付近から通学してくる奴が特に多い。もちろん俺もその１人だ。

校舎は新校舎と旧校舎に分かれている。基本授業が行われるのは新校舎だが、特別授業などの場合は旧校舎だ。一般の教室やパソコン室。職員室や会議室などは新校舎にあつまっているため、その他の教室などは旧校舎に集まっている感じだ。

ちなみに俺の教室は３階だ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6475a/

県立正傳高校

2010年10月28日00時58分発行